

第一部

ミュージカル「チェス」ハイライト / 編曲：ヨハン・デ・メイ (演奏時間：約16分)

1976年に起きたロシアのチェスプレイヤー：ヴィクトル・コルチノイの西側亡命を基に制作されたミュージカル「チェス」は、1986年5月14日にロンドンにて初演され、以降はブロードウェイやオーストラリアなどで上演され絶賛を浴びた。「ダンシング・クイーン」で一世を風靡したスウェーデンのポップグループ ABBA のメンバーであったベニー・アンダーソン、ビョルン・ウルヴァースの2人が劇中音楽を手掛け、「エビータ」「ジーザス・クライスト・スーパースター」のティム・ライスが原案・作詞を務めた。クラシック、ポップス、ロックと幅広い楽曲構想を持ち、日本では過去に2012年、2013年にコンサート版が、2015年、2020年にはミュージカル版が上演され、好評を博している。

舞台は、アメリカとソ連が世界の覇権をかけて、互いを牽制しあっていた「米ソ冷戦」の時代。イタリアで開催されるチェスの世界選手権は、チャンピオンのアメリカ人：フレディとソ連の挑戦者：アナトリーの一戦を迎え、全世界が注目することとなった。ソ連という国家を背負ってチェスをプレイすることの重圧に苦しんでいたアナトリー。一方で、自由奔放な性格のフレディは、記者会見でチェスと関係のない質問に及んだ記者を殴り、非難にさらされる。自身の成功を誰にも理解されない孤独なチャンピオンの気持ちとは裏腹に、アナトリーはこの騒動が自分を動揺させる作戦だと疑う。純粋にチェスで相手に勝ちたいと思う二人の気持ちは、両者ともに政治的に利用される不信感を生み出していた。

試合が始まって周囲への不満が残るフレディは、途中で試合を放棄し立ち去ってしまう。それぞれの介添人を交えた再開の協議が設けられたが、そこでフレディの恋人であり介添人でもあるフローレンスと、アナトリーは少しずつ心惹かれ合う。親密になる二人に苛立ったフレディは、試合の再開を約束するも、フローレンスとの関係に終わりを告げた。再開された試合は、精彩を欠くフレディの完敗、新たなチャンピオンとなったアナトリーだったが、ソ連の手によってフローレンスが父を亡くしているという事実を知り、ソ連に残した妻を捨て、フローレンスとともに亡命することを決意する。アナトリーの介添人：モロコフに阻まれながらも無事に亡命を遂げ、自身の決断の正しさと祖国への忠誠を自らに語りかけ、強く心に刻む。

1年後の世界選手権。チャンピオン・アナトリーの相手はロシア人のビガンド、介添人にはモロコフがつき、コメンテータはフレディが担当していた。試合前のインタビューで、フレディは昨年の仕返しのように、無駄な質問や、アナトリーの元妻スヴェトラーナの登場でかき乱し、怒ったアナトリーはその場を去ってしまう。さらに試合前に、モロコフとフレディは、フローレンスの父が実はソ連に投獄されているという話をういてアナトリー・フローレンス・スヴェトラーナに取引を持ちかけ、状況を攪乱させる。様々な思惑に惑わされ気が狂うアナトリーだったが、最後は自身のチェスプレイに全力を投じることで思いを貫き、試合に勝利する。王座防衛を果たしたアナトリーはモロコフの取引に従い、フローレンスの父の解放と引き換えに、フローレンスに別れを告げ、妻の元に帰る。様々な思惑が交じる中で、フローレンスの幸せを願ったチェスプレイなのであった。

この作品は当団第1回定演でも演奏された、楽団としても思い入れの深い作品である。チェスプレイヤーと介添人4人のやり取りを描く「Quartet」、フローレンスとスヴェトラーナの互いへの想いを描く「I know him so well」、亡命を羨む大使館の公務員を描く「Embassy Lament」、チェスの試合の緊張感立つ「Chess」、亡命成功時のアナトリーの胸の意思を描く「Anthem」。冷戦下の時代に国の駒として振り回された多くの人々と、自身や大切な人の幸せを勝ち取るために人生の駒を動かし続けた1人の男の物語を、Gambit 定演10回目という重みと共に楽しみいただきたい。(文責、瀧康二)

ポップコピーはスコット・マカリストアーによって作曲された 3 つの楽章からなる作品で、各楽章はアメリカの有名なポップカルチャーのキャッチフレーズに触発され書かれている。

1 楽章は”More Cowbell!”という題で、これはアメリカの Saturday Night Live という深夜に放送されているコメディバラエティ番組のスキット（寸劇）に基づいており、なんとといっても 4 つのカウベルがバンドを支配するのが非常に印象的である。一見カオスを作り出しているかに思えるカウベルが、実は複雑なリズムセクションを持つバンドをまとめる役割を担っている点にも注目したい。

2 楽章”One Time at Band Camp”はアメリカの青春コメディ映画、American Pie のフレーズであり、作品中の Michalle Flaherty というキャラクターがフルートを演奏することにちなみ、フルートソロ、フルートセクションがフィーチャーされている。この楽章は夏の恋愛の思い出の酸い、甘いを描写したものになっており、1 楽章とは打って変わって非常に落ち着いたテンポの中、漂うように曲は流れていき、まさにぼんやりと回想に耽っているかのような場面となっている。感傷的なフルート、ソプラノサクスのソロを存分に楽しんでいただきたい。

3 楽章”Serenity Now”は Seinfeld というアメリカのシチュエーションコメディ（特定の場面や状況で展開する喜劇作品）のラストシーズンのエピソードに触発されている。登場人物フランク・コスタンザは怒ったときに”Serenity Now（鎮まりたまえ）”と言うようにアドバイスされるのだが、彼が雇っていた人物には、それは感情を押し殺しているから危険だ、とも言われるのだった。一方で作品中の別の登場人物であるクレイマーも、怒りを感じた時に”Serenity Now”と言うのであったが、ついに抑圧された怒りが放たれ、精神崩壊のような状態となる。曲と照らし合わせてみると、冒頭こそ静かではあるが、そこに現れるバリトンサクスのソロは内なる怒りを表現しているようにも聞こえる。しばらくすると非常に速く激しい音楽が始まる。作品中では少なくとも同時に 4 つ以上のストーリーラインが進行しているが、同じようにこの楽章の音楽でも複数のラインが進行しており、狂気と正気の狭間に立たされている感覚を味わう。音楽のフレーズとしてはホルストの第一、第二組曲、ヒンデミットの交響曲変ロ調、スーザの星条旗よ永遠なれが同時になだれこんできたりしており（下図）、まさにカオスの様相を呈している。中間部ではその様は一旦収束するものの不気味な雰囲気があり、制限時間付きのゲームをプレイしているような、迫られる感覚とともに進んでいくのが特徴である。中間部を抜けると再び激しくストーリーラインの交錯する場面となったかと思えば、テンポもリズムも定まっていない小節が現れ各楽器による叫び声に近いような演奏が行われる。叫び終わったかと思えばリズムを刻み、”Ha! Ha!”と奏者が声を上げる、まさに精神が崩壊したような秩序のない場面となる。一瞬静まって綺麗な讃美歌風の響きの音楽になったと思った刹那、不協和音へと変化し、最後は行進曲風に駆け出して終焉を迎える。この忙しすぎるほどの起伏の激しい音楽をライブで楽しんでいただけると幸いである。



①ヒンデミットの交響曲 ②ホルスト第二組曲 3 楽章
③ホルスト第一組曲 1 楽章 ④星条旗よ永遠なれ

(文責、池田恭祐)

交響曲第41番 ハ長調「シンフォニア・アンダルシア」 / デリク・ブージョウ

本演奏会のメイン曲「シンフォニア・アンダルシア」。アンダルシアとはスペインの最南端に位置する自治州であり、本曲ではアンダルシア州を構成する8つの県が全8楽章に渡って描かれている。演奏時間は80分と長大であるが、決して堅苦しい曲ではない。情熱と太陽の国スペインのイメージにぴったりの陽気かつ感動的な名曲である。昨今、新型コロナウイルス蔓延や急激な円安により、海外旅行に思うように行けない日々が続くが、今日は大阪に居ながらにしてスペイン旅行に出かけたような気分になっていただけたらと思う。

今回は、某観光案内本をオマージュした曲紹介でお送りする。右下のQRコードからカラー版にもアクセスできるため、ぜひそちらも楽しんでいただきたい。

アンダルシアの聴き方

2024

アンダルシアの基礎知識

日本人が最もスペインらしさを体感できる地域であろうアンダルシア。1年を通して温暖で雨が少なく、典型的な地中海性気候である。闘牛やフラメンコといったスペイン文化の発祥地でもあり、世界遺産も数多くあるためスペインの観光ランキングでは常に上位に位置する。

また、15世紀までイスラム系王朝に支配されていたため、イスラム教とキリスト教が融合した文化を感じ取ることができるのもアンダルシアの魅力である。本曲でも、純粋なスペイン音楽とはまた違ったエキゾチックな雰囲気を楽しんでいただけるのではないかと思います。

基本データ

面積：87,268km² 人口：820万人
(近畿：33,120km²) (近畿：2,194万人)



アンダルシア州内の8つの県。 著作者：freepik



フラメンコ



闘牛

コラム

フラメンコの特徴

フラメンコは、ジプシー(ロマ)起源の音楽および舞踏である。踊り、歌、ギターとの3人から成立する。本曲でもギターやカステネットを活かしたフラメンコ風の音楽が多用されている。プロギタリスト加治川岳氏による情熱的なギターソロにもご注目いただきたい。

曲紹介カラー版↓



世界遺産のアルハンブラ宮殿は必見！ 第1楽章：グラナダ

15世紀までイスラム系のナスル朝が栄えていたグラナダ。その時、王が住んでいたのが世界遺産アルハンブラ宮殿である。曲中では、宮殿らしい気品漂う曲調と、かつて王国が隆盛を極めた時代を表現したような力強い曲調が交互に現れる。これから始まるアンダルシア旅行への期待を込めてお聴きいただきたい。



アルハンブラ宮殿

「オリーブオイルの首都」とも呼ばれる 第2楽章：ハエン

世界有数のオリーブ産地。街の真ん中にはルネサンス様式のハエン大聖堂があり、一大観光名所となっている。曲中では、そんな長閑かつ神聖な雰囲気が表現されており、とても感動的な楽章になっている。団員お墨付き、シンフォニア・アンダルシア随一の泣きメロディーを思う存分ご堪能いただきたい。



広大なオリーブ畑



ハエン大聖堂

砂漠で西部劇を堪能しよう！ 第3楽章：アルメリア

アンダルシア内で最も雨が少なく乾燥した気候の街。ヨーロッパで唯一の砂漠があり、西部劇やインディ・ジョーンズなどのロケが行われていた。曲中では西部劇らしいノリの良い音楽や、銃声などの効果音を使った荒々しい音楽も聴くことができる。単独でもメインに成り得るほど、色んな場面が味わえておトクな楽章である。



アルメリア大聖堂



西部劇のロケ地

はるか昔から続く港湾都市 第4楽章：カディス

紀元前から貿易港として栄えていたほど歴史のある街。4月に公開された映画「ゴジラ×コング」では、カディスがロケ地として選ばれている（もっとも、こてんぱんに破壊されているそうだが…）。曲中では、夕焼けに照らされた海岸のような、哀愁漂う感動的なメロディーが奏でられる。



海岸沿いのカディス大聖堂

ピカソの出身地とリゾート地 第5楽章：マラガ

コスタ・デル・ソルというリゾート海岸の玄関口で知られる街で、画家ピカソの出身地でもある。曲中では、何故かクラクションが盛大に鳴らされる破天荒な街として表現されている。何故なのかは不明である。どなたかご存じであればアンケートに正解をご記入いただきたい。



マラゲータ闘牛場と市街

100万人がいた後ウマイヤ朝の首都 第6楽章：コルドバ

かつての後ウマイヤ朝の首都であり、10世紀時点で世界一人口が多い都市だった(100万人)。メスクータと教会の両方を兼ね備えた世界遺産、メスキータが有名である。曲は、輝かしいトランペットとホルンのファンファーレから始まり、かつての繁栄を思い返すかのような豪華絢爛なメロディーが展開されていく。



メスキータ



ローマ橋

コロンブスはここから旅に出た 第7楽章：ウエルバ

コロンブスの史跡が数多く残る。コロンブスはこの地で経済的な援助を受け、初航海へ出発することができた。曲は、難解な変拍子のフレーズから始まり、途中でジャズのような場面を挟んだ後、幸福を感じさせるメロディーへとつながる。一度聞くと耳から離れないフレーズである。コロンブスのサンタ・マリア号



コロンブスのサンタ・マリア号

スペイン南部の政治・経済・文化の中心 第8楽章：セビリア

アンダルシア州の州都であり、最大の人口を有する。クラシック曲「セビリアの理髪師」や「カルメン」の舞台としても知られ、フラメンコの本場でもある。曲は最終楽章にふさわしい、明るく明日への希望を伴った雰囲気である。最後のマーチを聴いたとき、きっと感動の涙が流れるに違いない。



スペイン広場

コラム

名産品&料理

何と云ってもオリーブオイル。スペインが世界一の生産量であり、アンダルシアはその中の75%を占める。

また、ガスパチョというトマトの冷製スープが名物料理。暑い気候には最適だそう。



ガスパチョ

団員投票企画

旅行で行くなら？

- 1位：グラナダ
- 2位：セビリア
- 3位：コルドバ

人生最後に聞きたい楽章

- 1位：ハエン
- 2位：セビリア
- 3位：カディス

吹いてて一番楽しい楽章

- 1位：セビリア
- 同率2位：
ハエン
アルメリア
ウエルバ

執筆者後記

昔からずっと待ちわびていたシンフォニア・アンダルシアを演奏でき、大変嬉しく思う。私事ではあるが、今夏に入籍するため、新婚旅行でぜひアンダルシアに行きたいと考えている。円高求ム。(文責、中西弘樹)